

農林水産大臣賞

白谷集落 (鳥取県日野郡日南町)

絆を大切にしながら
次世代に引き継ぐむらと農地



「白谷集落」の皆さん

1. むらづくりの主体

- | | |
|-----------|--|
| (1) 名 称 | しろいたにしゅうらく
白谷集落 |
| (2) 所 在 地 | ひのぐんにちなんちようふくづか
鳥取県日野郡日南町福塚 |
| (3) 地 区 名 | しろいたにし
白谷地区 |
| (4) 地区の規模 | 1 集落 |
| (5) 代 表 者 | しろいたにしゅうらく
白谷集落協定代表 こだけ ひとし
等（農事組合法人ファーム白谷 代表理事） |

2. 地区の概要

(1) 日南町の概要

日野郡日南町の人口は約4,700人で、鳥取県の最西端にあり、県西部の中心都市の米子市からは40km前後である。県境で島根、広島、岡山の3県と接している。県3大河川の一つである日野川が町の中央部に流れ、その流域となる標高280～600m付近の高原地帯に集落や耕地が広がっている。

映画「もののけ姫」に登場する製鉄法「たたら」が、この地に6世紀後半から平安時代には既に存在していたと考えられている。製鉄の熱源となる森林資源が非常に豊かであり、林業も盛んである。

中国山地に育まれた水と夏場の冷涼な気候を利用してできる「コシヒカリ」は「日南米」として有名であり、地域団体商標となっている「日南トマト」をはじめ、ピーマンや白ねぎなども特産品となっている。

町の高齢化率は40%を超え、過疎化も深刻さを増しているが、歴史や豊かな自然に恵まれて、特色のある農林業が営まれている地域である。5年前から町が移住施策を本格化して、日南町の農林業に魅力を感じた若者が、I J Uターンや地域おこし協力隊などの形で移住し、定住も進んでいる。

位置図



(2) 白谷集落の概要

白谷集落は、町の中心部から見て南部に位置する福塚地区の字の1つで、人口は54人、20戸の小さな集落である。県境に近い山間地で、「くづかがわ」の支流「しろいたにがわ」の最上流に位置しており、日照時間は少ない。良質な砂鉄と「たたら」の燃料となる雑木を求めて、県外から多くの人々が日南町へ移り住んできたため、白谷



白谷集落の風景

集落も岡山県（備中の国）を祖先のルーツとする住民が多い。

山を徐々に切り崩していく「かんな流し」と呼ばれる独特の砂鉄採取法によって流された土砂で徐々に谷が埋まって農地が形成され、その標高は300～500mと、高低差が非常に大きい。基盤整備がなされていない「棚田」状の水田も少なくないが、見上げるような畦畔でも、草刈りが丁寧になされている。

今では、全戸が専業あるいは兼業で農業を営んでいるが、かつてはどの家も炭を焼きながら、谷あいの農地での稲作、「入会地」となっている山腹での放牧を行って、皆が助け合って生計を立ててきた。

【地区の概要】 ※白谷集落の概要

総人口	農業就業人口	総世帯数	総土地面積		耕地面積	採草牧草地面積	山林面積
54人	20人	20戸	347ha		27.4ha	0ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第Ⅰ種兼業農家	第Ⅱ種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
20戸	20戸	7戸	0戸	13戸	4戸	3戸	13戸
主要作物（農業産出額）		水稲：1,593万円 白ねぎ：432万円 トマト：120万円					
地域指定状況					農業地域類型区分		
農振指定：昭和47年度指定 森林整備市町村指定：有 都市計画：無 その他：過疎、豪雪、特定農山村					市町村	当該地区	
					山間農業地域	山間農業地域	

※2010農林業センサス、県市町村調べ

3. むらづくりの内容と成果

（1）むらづくりの動機、背景

ア つながり、その核となるもの

「たたら」をベースにする林業や農業の長い営みは、「共同」や「話し合い」の精神、そして地域の「自主性」を生み、今日まで人々の中で大切に育くまれ、伝えられてきた。とりわけ、農業・農地に対する人々の思いは強い。

その代表的なものが、人々を守り、農業の振興に尽くしたという9人の戦国武将（九牛士：「九塚」の由来）の伝説である。この武将たちは敵方の小早川氏に助命されたと言われ、この言い伝えにまつわる集落行事「祈祷」が江戸時代から毎年行われている。「祈祷」には集落の全戸から40名程度参加し、五穀豊穡への祈りと九牛士、小早川氏への感謝の気持ちが捧げられている。

イ 楽をして儲かる農業をしたい

一方、冬場の積雪に加え、湿田も多いことから、白谷集落における農業は条件的に厳しかった。昭和40年代、米は実質的な価格が大きく下がり、農村には閉塞感が広がった。

このような状況の中、昭和49年、現在の「農事組合法人ファーム白谷」の代表を務める小竹氏が集落にUターンし、基盤整備もなされておらず、全て手作

業で行う農業を見て、「なんとか楽をして儲けたい」と強く感じたという。

昭和53年、小竹氏以外にも同じ思いの農家8名が立ち上がり、農作業機械等の共同利用組合「白谷共同作業所」(以下「作業所」という)を設立した。コンバイン、トラクター、乾燥機、籾摺機等を整備して、集落内の作業受託を開始した。受託面積は順調に伸び、作業所の経営も設立5年後には安定して、地域農業の核となる組織が誕生した。



白谷共同作業所

ウ むらがひとつになるように

農業や農地に関わる問題は利害関係も生じるため、話し合っても満場一致で事が解決するとは限らない。作業所の取組も全ての農家の賛同や参加が得られたわけではない。昭和63年から平成7年にかけて行われた土地改良事業においても同様に、賛同者と反対者がいる中、地域農業がひとつの方向に向いて進むことは多くの困難があり、時に、人々の間に軋轢も生じかねないこともあった。「農業だけのつながりや発展のみを追求するのでは、集落がぎくしゃくし、むらの良さが発揮できないこともある」との気持ちは多くの住民が抱いていた。

こうしたことから、白谷集落では、「自助」や「互助」のベースとなる自治会活動や文化、伝統を守る取組が重視されてきた。集落ぐるみの鳥獣対策や農事組合法人における女性の力を借りた米の直販といった新たな分野へのチャレンジなど、より多くの人々が参画し、活躍できる組織・環境づくりも、すべて「むらの自治」の延長線上にある。すなわち、白谷集落では「地域のまとまり」と「地域産業」がバランスをとりながら、農地が維持され農業が発展してきた。

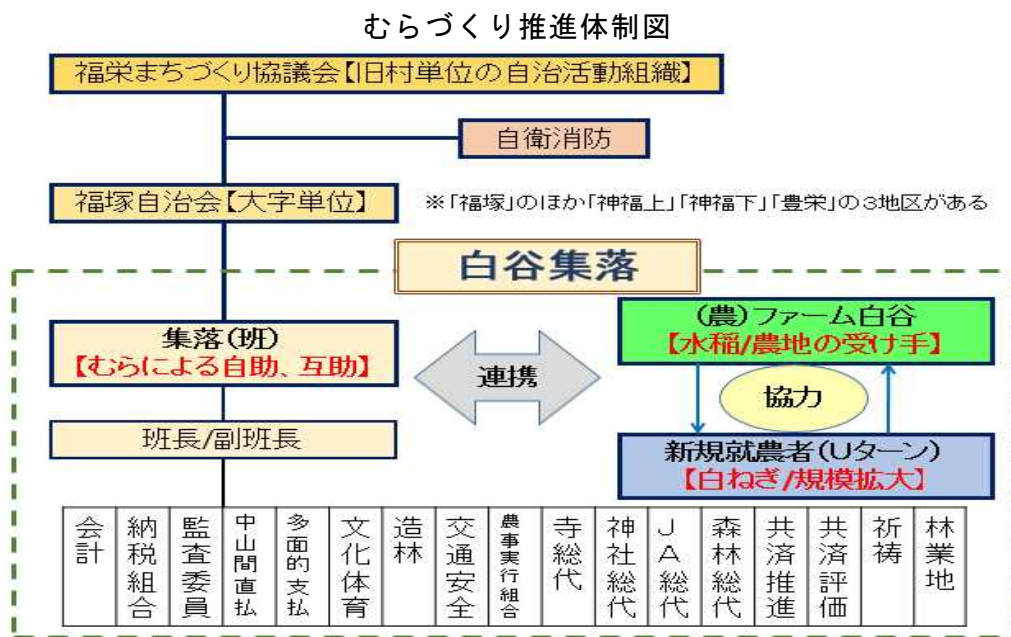
(2) むらづくりの推進体制

ア 自治会(班)組織

白谷集落は、旧村である福栄地区の「まちづくり協議会」の下部組織であり、福塚地区の班として、農事組合法人や新規就農者と深いつながりを持ちながら、共同作業、レクリエーション、生涯学習、伝統芸能、祭りなどのむらづくり活動が積み重ねられている。

昭和54年に「白谷公民館」が町事業を活用し、約1/2の公的補助を受けて整備されてからは、「祈祷」も公民館行事となり、毎年3月第2日曜日に行われるようになった。毎月、集落(班)の定例会が必ず開催されて、むらの生活と農林業に係る「話し合い」と「合意形成」が行われ、住民自治の基礎として機能している。

こうしたことから日本型直接支払制度の各種協定の締結や活動も円滑に進み、中山間地域等直接支払は平成12年度から、農地・水保全管理支払(現:多面的機能支払)は平成19年度から取り組んでいる。



イ 農事組合法人「ファーム白谷」

白谷集落の農業は、自らが責任を持って農地を管理することを基本として、白谷共同作業所が農地の受け皿となり、機械を共同利用することで生産コストの低減を図りながら維持してきた。

しかし、作業所は有志によって運営されていたものであり、参加していない農家も多かった。いずれは高齢化によってリタイアする農家の農地を含め、誰がどう耕作していくかを決めなければ、集落の農業は衰退せざるを得ない。

平成25年夏から、集落の農家と作業所のメンバーが話し合いをはじめ、より多くの人が参画しやすい体制の検討を開始した。その結果、平成26年2月に、集落内からさらに3名、集落外からも1名（しろういたに）が加わって「農事組合法人ファーム白谷」



女性も経営に参画するファーム白谷

（以下、「ファーム白谷」という）が設立された。

現在、代表の小竹氏が中心となり、規模拡大と耕作放棄地の復田、直販による収益の拡大などに取り組んでいる。必要となる機械や施設の整備にあたっては、町や県の財政的支援が可能となる「がんばる農家プラン」を作成し、乾燥機、保冷库等を平成28年度までに計画的に導入することとしている。

（3）生産面における取組と成果

ア 守るべき農地はどこか？むらぐるみの鳥獣対策

周辺部で山や農地の手入れ不足や人口減少が進むと、鳥獣被害が増加してくるが、白谷集落においても、平成20年代に入り、イノシシによる水稲の食害等が目立つようになってきた。

集落内から対策が必要との声が上がり、ワイヤーメッシュを使って、集落の周囲を囲うことが決まった。町や県の補助と中山間地域等直接支払制度も活用し、資材費の負担はゼロとなった。設置作業は平成23年の農閑期に、集落総出で行われ、総延長10kmの柵が完成した。

侵入防止柵の設置は単に鳥獣被害を食い止めるだけの効用ではなく、「農地を皆で点検」し、「集落で守るべき農地をきちんと把握できた」という意義が大きい。これをきっかけに集落は法人設立の話し合いへと進んでいった。



ワイヤーメッシュ設置作業

イ 「人・農地」の話し合いと農地の保全

守るべき農地を決め、それらの農地の受け手を作業所から法人へ引き継いでいく過程において、集落全体で話し合いが行われたことは、地域の農業や農地の将来を考える上で、非常に重要であった。

町やＪＡ、普及所等も初期段階から参画し、農事組合法人という社会的信用力のある組織が農地中間管理事業などを活用しながら、農地集積を進めることが前提となって話し合いが進められたことも、合意形成を加速化させた要因と考えられる。

現在、本格的な集落営農体制がスタートし、「ファーム白谷」と利用権設定をしている農地は集落の約50%、作業受委託を含めると集落全体の7割を超える15戸が農事組合法人に農地を託している。「ファーム白谷」は今後もオープンな運営により、最終的に全戸の農地を請け負いたいとしている。

ウ 新規就農者の育成

新しく設立された農事組合法人は、平成27年にＵターン就農した山本氏とも連携して、集落内の農地保全に取り組んでいる。

中山間地域等直接支払制度の集落協定の中で、農事組合法人が年2回、山本氏が年1回の^{ことうん}耕耘作業を行うといった作業分担をしているほか、山本氏も所有する水田を農事組合法人に作業委託することで、白ねぎの収穫など作業のピーク時は自分の経営に専念できるというメリットがある。

この結果、山本氏は平成27年度において、ＪＡ鳥取西部日南支所白ねぎ生産部「出荷数量ベスト10」入りを果たし、「ファーム白谷」との連携が、集落の新たな作物の産地づくりにもつながった。このように、農事組合法人と個人農家が役割



ねぎ生産に取り組むＵターン就農者

を分担し、水田をフルに活用することで、集落内に耕作放棄地は発生していない。

エ 新たな取組と女性をはじめとする多様な人材の参画

「ファーム白谷」には女性の構成員が2名参画しており、法人の運営面でも貴重な戦力として活躍中である。また、構成員ではないが、活動に協力的な集落の女性をはじめとする住民の参加が、法人の取組を新たなステップに導いている。

ファーム白谷は、水稻（コシヒカリ）を中心に栽培しており、^{なかうみ}中海で採れた海藻を肥料にした特別栽培米の栽培を行うなど、付加価値向上の取組も行っているが、平成27年、「ファーム白谷」の代表者の小竹氏が、さらなる米の収益性向上（販路拡大）を図る目的で、普及所に対応を相談したところ、担当普及員の仲介により、鳥取県産業振興機構などの意見交換や直販に係る商談会に法人として参加することとなった。あわせて、県の支援事業を活用して、独自の米袋を作成して直接消費者に売り込むこととなった。

全く初めての取組ながら、^{かいけ}皆生温泉との商談には集落の女性も積極的に参加して、PR活動を実施した。また、米子市内の民間事業者との米の取引にあたっては、女性陣が試食用おにぎりを作って配布したことがきっかけとなり、今では取引量も増えて高値販売が実現できている。

新しい米袋にある「ファーム白谷」のロゴは、集落に在住するデザイナー^{しろいたに}（白谷工房）が作成したもので、高低差のある集落の地形をイメージしている。

このように、「地域の人材を広く活用すれば様々なことができる」ということが「ファーム白谷」の経営方針となっており、高齢者や女性が主体となって取り組める品目を検討し、平成28年には、ブロッコリーとサトイモの試験生産に取り組んだ。



ファーム白谷の米の販売



野菜栽培にチャレンジ



（左）米袋のデザインを手がけた白谷工房 （右）白谷工房の木工品

(4) 生活・環境整備面における取組と成果

ア 地域の歴史や資源の再発見とコミュニティの醸成

白谷集落では、平成26年5月から2ヶ月に一度、生涯学習活動「白谷スクール」を集落主催で行っている。学習テーマは、生活、福祉、健康、鳥獣対策、むらの歴史など幅広い分野である。

もともと団結力が強い集落ではあるが、高齢化が進み、農業が衰退すると人々の関わりが希薄にならざるを得ず、自治会では何か集落がまとまる活動をしたいとの意見が何度となく出されていた。このような声を受けて、「白谷スクール」は平成26年度に就任した山本班長（集落の自治会長）の努力で実現した。



白谷スクール

町や教育委員会のほか、日野郡鳥獣被害対策協議会などの担当者を招いて講習を受けた後、「お茶会」といわれる茶話会を開き、コミュニケーションの場を設けている。堅苦しい雰囲気は全くなく、誰でも参加できることから、ほとんどの世帯から出席がある。特に、女性の参加者が多く、賑やかで楽しい会となっている。

イ 女性の手による周辺環境の整備

白谷集落の特色の一つは、むらが非常に美しいということである。班の婦人部では3ヶ月に一度、公民館の周辺を中心に清掃活動を実施している。こうした意識が各戸に浸透し、むら全体が非常に清潔で整然と保たれ、中国山地を背景に見る田園風景は見る者を魅きつける。



活動を支える女性の活躍

そのほか、婦人部が中心となって、花壇の手入れや敬老会でのお年寄りへの食事の提供、夏場のバーベキューなどを行い、地域にうるおいと安らぎのある環境づくりに女性の力が活かされている。

ウ 水源の保全～「まめな水」

日南町では平成23年度から鳥取大学との連携を強化し、その一環として2年間で60箇所の水源を調査した。白谷集落には、かつて「白谷水道」と呼ばれる清水の湧く元井戸から郷中まで導水（引き水）があり、人々の生活にとって欠かせないものであったことから、調査地点に選定された。その結果、「おいしい水指数」が大変高い値であることが判明し、町が原水のペットボトル3,000本を「まめな水」（「まめ」＝「元気」「健康」「息災」の意）として販売したと

ころ、消費者にも好評であった。

このような取組が集落にも影響を与え、水源を守ることが大切であるとの地元の意識が高まり、平成28年、白谷集落はむらを流れる白谷川を清掃、整備するボランティア団体となることを決め、県に登録申請し活動を始めている。



白谷川の保全

エ 伝統芸能の保存と伝承

白谷集落を含む福栄地区^{ふくさかえ}には、「かしらうち」と呼ばれる伝統的な芸能活動（鳥取県無形文化財）が残されている。少なくとも明治時代以前から存在していたと言われているが、戦時中に中断され、昭和28年に復活した。舞いの動作や太鼓の種類、歌詞などは経験者の記憶をたどって、現在の形に復元されたものである。

現在、白谷集落の集落協定代表であり、ファーム白谷の代表理事でもある小竹氏が「かしらうち保存会」の事務局も務め、地域の子供も達に参加を呼びかけるとともに、着付担当などに多くの女性の力を借りて、保存と伝承に尽力している。



伝統芸能「かしらうち」

4. むらづくりの優れている点

白谷集落は、山あいにある小さな農村で、全戸が専業あるいは兼業農家である。日照時間が短く、冬場は積雪もある水稻単作地帯であり、担い手不足はもとより、農業や農村の将来が危ぶまれてもやむを得ないと思われがちな地域とも言える。そのような中にあっても、地域の絆を大切にし、若い人も定着して、農業や農地を着実に次世代へ引き継ぐ仕組みが築かれてきたことが最も注目すべき点である。やる気のある農家が集まって組織を作り、「話し合い」を重ね、地域の信頼を得ながら、確実に農地が託されている。



話し合いを重ね一つにまとまる

一方、生活面でも五穀豊穰^{ごこくほうじょう}を祈願する「祈祷」をはじめ、周辺地域と協力し伝統行事の復活、継承を図っている。また、住民自らのアイデアで始めた健康や農業、集落の歴史など身近なテーマで学習を重ねてきた生涯学習講座「白谷スクール」がコミュニティの醸成に果たした役割は大きい。これらの活動は、地域を牽引してきたリーダーや、地道に地域を支えてきた女性をはじめとする多くの人の

参画の上に成り立っている。

こうした取組がうまくかみ合って、人々の心に「この地で生きていく」、「自分たちの農地は自分たちで守る」という強い気構えと誇りが脈々と受け継がれてきた。農事組法人ができた現在、自分が機械を所有して農地を耕す負担がなくなった後継者は、安心してむらに回帰できるようになっている。

「むらづくり」や「コミュニティの醸成」は容易なことではないが、白谷集落の取組は、「地域で生きるということはどういうことか」というテーマについて長い歴史と住民の地道な努力で答えを導き出した事例であり、本来の農山村のコミュニティのあり方を示すものである。